
DEVIL-DEDICATE

さあ坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL - DEDICATE

【Nコード】

N9213D

【作者名】

さあ坊

【あらすじ】

突如現れた謎の『悪魔』の名を持つロボット。そして謎の『少女』が放つ世界の理。謙虚に生きてきた福音莉音の前に現れた真実が彼を運命の戦いへと導いていく…。

第1話 日常の崩壊（前書き）

色々間違っているかと思いますが、初小説です。
見捨てないで読んでやってください。

第1話 日常の崩壊

目立たずに。

それが俺のポリシーであり、絶対厳守の約束だった。何故なら俺は臆病で、謙虚に生きたいからである。

100点を取れるテストをわざと無難な点数にしたり、学年新記録を出せる100m走を遅く走り無難な中の上のタイムを出したりなるべく目立たなく生きてきた。

どうせ目立つたつてろくなことがない。そんな奴は足下を掬われて惨めになるだけだ。

そうやってずっと俺は17年間そうやって生き、今日も無難な日で終わり、明日も無難な日が始まると思っていた。

あんな事が起こる前は…。

ざわめく教室内。今日は6月6日。初夏の日差しが教室へと降り注いでいる。あと数週間もすればうんざりするような暑さが襲ってくるだろう。

クラスメートたちが3時間目のテストのことを話していたり、昨日のテレビの内容を話している。

あまり興味がないので、顔を俯せて寝てるふりをする。こうしていれば誰も話し掛けてこようとしないうちとしてもしっかり助かっている。

俺の名前は福音莉音。ふくおと りおん いつもこつやつて他人との関わりを遠くしている。たまに関わる時は謙虚に接するためか、当たり障りのないクラスメートとして扱われている。

今は2時間目が終わった休み時間。まだ学校が始まったばかりで少し眠気がする時間。

どうせいつものように先生が来て、いつものように授業をして、

いつものような帰り道を帰る。そしていつものように寝て、いつものような朝が来る。

単調。けれど高望みしてはいけない。そんなことをしたらたちまち足を掬われてしまうだけなのだ。ならば最初から謙虚に生きていけばいいだけのこと。

きっとそれが一番なのだ。人とは必要最低限に関わり、無難に謙虚に生きる。そうした方が良いのだ。絶対に。

そんなことを考えていると横に気配がある。考えるまでもない。あいつだ…。

「ねえ福音君、もうすぐ先生来るから起きていた方がいいよ」

「……いつも寝ていないって知っているくせに」

顔を上げれば、自分より頭ひとつ分小さい位の背に童顔で男子生徒が此方の様子をうかがっていた。

目は大きく、少し垂れている。髪は黒色でショートカット。腕も細く強く掴むと折れてしまいそうである。頬は少しピンク色で、服を女性用にしても気にならないほど童顔だ。

コイツは毒島蠍^{ぶすじまかつ}。何故が何かと俺につきまとってくる。特に気にならないのであまり意識したこと無いが俺の中では親しい部類に入る。

「テストあるけど、勉強しなくていいの？」

「あー…別に。昨日のうちに勉強したし。まあいい点は望めなさそうだけど」

「じゃあ最後まで頑張らないと」

そう言いながら無邪気な笑顔をする。

本当…こいつ女じゃないか？と勘違いしそうだ。

「ふっ…どう頑張っても毎回試験学年一位の天才様には勝てませんよ」

「そんなこと言わずに諦めないでやれば福音君だって良い点とれるって」

「…人間高望みしない方が身のためなのさ」

毒島は少し怪訝な顔をする。仕方がないだろう。謙虚に生きるのが俺のポリシーなのだから。

キンコーンカーンコーン

「ほら、鐘なっただから席に戻りな」

「…うん」

背中を小さくしながら席へ戻る毒島は何だか寂しそうだった。しかし別段罪悪感もあり生まれてこない。自分の信念を守っただけだと、そう感じた。

まもなくして教室のドアがあく。3時間目の担当の先生が来た。

「ほら、席に着けー。さっさとテスト始めるぞー」

クラスメートが愚痴をこぼしながら座り始める。全員座ったのを確認してから先生はテストをくばり始めた。

内容を見れば、1分で出来るような簡単な問題ばかり。でも……。

また俺は100点を取れるテストを70点にした。

少しずつ回り始める

少しずつ狂い始める

始まりはいつ？

終わりはどこ？

だれも知らないこの旅は
いつともしれない無限回廊

でも

でも

でももうピリオド

やっと見つけた

やっと掴んだ

もう絶対に………

放課後

学校が終わるとすぐに帰るのが俺の日間だった。部活も入っていないし、そもそも興味が無い。家に帰ってゲームでもする方がよっぽど有意義に思える。

下駄箱に行くの外には野球部がランニングをしているのが見える。汗水たらして一生懸命に、一心不乱に。

そんなに熱中出来ることがあるなんて俺にはある意味羨ましかった。努力しようとするのがない。何故なら努力する必要がないからである。

昔は努力していた記憶があるが、今となっては何ら必要ない。謙虚に生きるのに努力は無駄だから。

端から見ればつまらない人生かもしれない。でもそれが俺にとって最善の道であり、最良の行いに違いない。

靴を履き、外へ出る。まだ4時前後なのであたりは明るい。さっさと家に帰ろうとした矢先…。

「福音君ー！」

声がした方を見ると、毒島が手を振って近づいてくる。

「何だ？俺はもう帰るんだが」

「いや…悪いんだけど頼みたいことがあって」

「頼みたいこと？」

「図書委員の仕事があるんだけど…相方が今日休みらしくて」

「ふんふんそれで？」

「…福音君が手伝ってくれたら凄く嬉しいんだけどなー」

上目遣いにトーンの高い声。きっとそういう趣味の人が見たら脇に抱えて連れて行かれるだろうと思う。

とどのつまり、人手が足りないから手伝えということなんだな。

「ねーお願いー」

「わかった、わかったからその上目遣いをやめろ」

「？」

こいつ…天然か。その笑顔も仕草も天然なのか。
まったく…どうやら今日はさっさと帰れなくなったようだ。

「ありがとうね」

「いいて。すぐに終わらせようぜ」

俺はわざわざ履いた靴を脱ぎ、下駄箱へしまう。

案外お人好しなんだと自分で自覚しながらも、相手が毒島だから
だと言い聞かせた。

場所は変わって図書室。

図書委員の仕事…もとい手伝いは古くなり、読まれなくなった本
を移動させることだった。

一言に移動させると言っても数は多く大変な作業である。図書室
の奥から古びた本を重ねて準備室へと運ぶ。確かに毒島一人では出
来なかっただろう。こんな日に相方に休まれるなんて不幸なもんだ。

「福音君ー！多分それで最後だからー！」

「わかったー」

毒島が準備室から顔を出して言う。あいつは準備室に運んだ本を整理する係だ。

まあ見た目からして体力がない毒島にとっては適材処置だろう。

最後の本を重ねていく。ソクラテスの哲学本、フレミングの教本、日本文学大全集…。確かに人気が出なさそうな本ばかり並んでいる。

その中に気になる本が一冊あった。

「何だこの本？」

手にとってまじまじと見る。タイトルは…。

「『七つの大罪』か…」

七つの大罪って言うところかキリスト教に出てくる用語だ。
興味本位で本をあけてみた。

「なにになに？……七つの大罪は七つの罪源とも言い、罪そのものではなく人間を罪へと導く感情や欲望のことである。
七つの大罪は悪魔と関係し、一つの罪につき一つの悪魔が象徴とされる。」

一つは傲慢の悪魔、ルシファー

一つは嫉妬の悪魔、レヴィアタン

一つは怠惰の悪魔、ベルフェゴール

一つは貪欲の悪魔、マモン

一つは暴食の悪魔、ベルゼビュート

一つは色欲の悪魔、アスモデウス

一つは憤怒の悪魔、サタン……ってあれ？この先は消えてるじゃないか」

悪魔の名がだけが冒頭で書かれていて、その先は色褪せていて読めない。確かに古い本だから文字が見えなくなって当然か。

「福音君？何してるのー？早くね」

「あ、悪い悪い」

すぐに本を閉じ、他の本を重ねて準備室へ持って行く。これで俺の仕事は終わりだ。

「じゃあこれ整理してるから、福音君は先に帰ってていいよ」

「そうか？じゃあまた明日」

「さようならー」

待つてあげるとかそういうのを考えないで身支度をする。忘れ物が無いか確認してからさっさと図書室から出てしまった。腕時計を見ると針はすでに6時を過ぎようとしていた。

「結構遅くなったな…すぐに帰ろう」

先程の本のことはすでに忘れて、すぐに下駄箱に行くことにした。

その時、俺は外の景色が僅かに歪んだのに気がつくことが出来なかった。

やっと見つけたと思ったのに

やっと掴んだと思ったのに

何てタイミングだろう

何て運命なのだろう

早く

早く気がついて

そうしないと

限界

何だろうか。図書室を出てから周りの様子がおかしい

下駄箱に近づくたびにに広がる違和感。

言葉では表せない。独特の雰囲気が漂っているようだ。そう、何かが変だ。まるで別の世界に飛び込んだような…。

疲れているのだろうか？いや違う。疲れていないわけではないがそういう感覚ではない。他の、もっと他の感覚…。

…あまり考えるのはよそう。すぐに帰って晩ご飯を食べれば気にならなくなる。

下駄箱についた俺はすぐに靴を履き、外へ出る。まだ運動部が活動をしているらしく、校庭内では大声が飛び交っている。

その姿をみて、やはり俺は少し羨ましく思う。

次のバスが来るまであと何分だったか…。ふと腕時計を見る。

「今は… 6時6分… 6秒」

刹那

周りの喧噪が消えた。

「…え？」

違う。周りの喧噪が消えたのではない。

周りの人間が消えたのだ。

つい先程まで張り切って声を出していた野球部がない。素振りをしていたテニス部もない。筋トレをしていたバスケット部もない。まるで世界には自分一人しかないような錯覚に陥りそうだ。

景色は変わらない。いや、一つだけおかしい物がある。

校庭には、一つの影。しかも巨大。今まではこんなものはなかった。どこにも存在していなかった。

だが目の前には一つの巨大な影。校舎ほどありそうな巨大な影。まるで恐怖を振りまくように生まれた影。

何だこれは？夢でも見ているのか？疲れすぎて幻覚を見てるのか？ならば早く醒めろ。

（違うこれは現実だ）

影が話し掛けてきた。

現実なものか。そんなの認めない。認めたくない。

（何故わかる？どうしてここが現実じゃないとわかるのだ？）

影が話し掛けてきた。

だってこんなことが現実なわけがない。現実であってたまるものか！

（何が現実で何が空想なのかも知らないお前が）

影が話し掛けてきた。

違う違う違う！これは現実じゃないんだ

（ならば目をこらして見てみるがいい）

影が話し掛けてきた。

そうすると、その影の実態が少しずつ見えてきた。
それは…

「あ…く…ま…」

影は、じつと此方を見ていたのだ。

二つの赤い目で。

二つの角を携えて。

二本の腕をついて。

今すぐにもで掴まれて握りつぶされてしまいそうな存在感。

背を向けたら一気に引き裂かれそうな殺気。

そして、体からあふれ出る恐怖。

まさにこれは悪魔ではないか。

「う……うわあああああああ……!!」

自然に悲鳴が出た。これが夢でも幻覚でもないことがわかる。
何故だかは知らない。けれどこれは現実。

悪魔は、じつと此方を見ていたのだ。

第2話 悪魔と少女

6 6 6

そういえば6 6 6というのは悪魔の数字と聞いたことがある。確か時間を見たときは6時6分6秒。ああそうか。俺は悪魔に魅入られたんだな。

逃げられない。夢でも幻想でもないのなら、俺の人生はこれで終わるんだ。どうせだったらもう少し頑張るべきだったなあ。例えば良い成績を残したり、仲良く友人と過ごしたり、活発に部活に勤しんだり。

だが手遅れ。すでに終幕。もはやピリオド。

巨大な影は今でも此方を見つめている。ああ、もう終わりだ。

俺は目を閉じ走馬燈でも浮かべようとした。

しかし、そんな俺を引き留める声が上がった。

「ちょっと！！何勝手にボーンとしてるのよ！！」

声は悪魔から聞こえた。さっき聞こえたのとは違う声。
俺はおそろおそろ目を開けてみた。

そこには少女がいた。

背は俺と同じくらいだろうか。女にしては高い。スタイルも良く、一流のモデルだと言われても疑わないだろう。

格好は何故か黒いタイツに、首から手てと足にかけて白いラインが入っているという奇妙奇天烈な姿だ。

髪は白く腰まで伸びている。どうやって手入れしたらあんな綺麗になるのだろう。

目は赤色。珍しい色だ。そして何より目立ったのは美しい顔だった。

まるで人間ではなく美術品。一種の芸術ではないかと思ってしまうほどだった。そう、ミロのヴィーナスが動き出した様に。モナリザのモデルが現れたかの様に。それに似た感銘を受けた。

少女はそんな俺を構わず、目の前に来て話し掛けてくる。

「吃驚するのは仕方ないけど、説明してる暇はないの。さっさと乗るわよ」

「へ？」

少女は俺の腕を掴む。

そしてぐいぐいと悪魔へと引っ張っていった。

正直状況がよく分からなくなってきたぞ。

「の、の、乗るって何にさ!？」

「説明してる暇はないって言うてるでしょ!すぐにアレに乗るのよ!」

少女が指さす方向には悪魔。

いや、そこに悪魔はいなかった。

いたのは『悪魔』のような『ロボット』。

大きさはやはり校舎くらいか。しかし膝をついているので立てばもっと大きいだろう。

二本の細い角が天を目指してついている。

全体的に白でカラーリングされて、肩と顔の一部分に黒が散りばめられてある。

目は少女と同じ赤色。ただこっちは見ているだけで足が竦むようだ。

人間でいう口には悪魔に相応しい牙の形をした装甲がついていた。

胸、腕、足にも何枚も装甲がついており、関節部分からはバネやらチューブやらが見え隠れする。

気になったと言えば背中に背負った二対の大剣。ファルシオンに似た幅が広い刃。鰐の部分が目玉の様な球体になっており、正直いって不気味だ。

そんなロボットが膝をついて待っているのだ。

「さあ！急ぐわよ！！」

「ちょ、待……うわああああ！！」

ロボットの手に無理矢理乗せられると、そのまま胸の高さまで持ち上げられる。

バシユッ……！

胸の部分が開いた。あそこがコックピットだとすぐにわかった。

「も…もしかしてこれを俺に動かせとか言うんじゃない……」

「よく分かったわね」

「……いやだあああああ！！いきなりそんなこと言われてもできっこない！！」

「大丈夫よ、出来るもの。そうきまっている」

この女、何を言い出すんだ？

突然現れたと思ったら今度は巨大ロボットを動かせだ？しかも出来る！と決まっている？何を世迷い言を言っているのだ。

冗談ならよそでやってくれよ！

「よそ見しないで乗る！」

「ぐわっ！」

無理矢理、というより尻を蹴られてコックピットに入らされた。

続けて少女も入ってくる。どうやらこれは二人乗りに出来ているらしい。

少女が乗ると同時にコックピットがしまっていく。

俺が下側のコックピット、少女が上側のコックピットに座る形になった。

コックピット内は座席の手すりの部分にレバーが二つ。足下には

足がちょうど入るような挿入部がある。

目の前には外の景色が広がっている。目の前だけじゃなく横、上、下、全面から外の風景が見えた。言うなればマジックミラーみたいな物なのか。触ればちゃんと感触がある。

……って冷静に周りの状況を言っている場合じゃなかった！すぐに降りなければ！

「おい降ろしてくれよ！」

「駄目。これからは何回も乗るんだから文句言わないで」

「だから何を言っているんだよ！だいたい君は何者なんだよ！！」

「私は………ちっ、来た！」

少女は強制的に話を切る。

俺はついにキレそうになった。

いい加減にしろと言おうとした瞬間、

ドカアアッ！！

突然横からの衝撃が走った。

あまりにも突然だったので、声を上げる暇もなかった。

横を見れば、50m先にまたロボット。

今乗っているのはまた違う。無機質な顔をしている。目は無く、変わりに緑色の線が横に走っている。

平らな頭に突起物はない。変わりに天使の輪みたいな光輪が頭上に光り輝いていた。腕はあるが手はなく、変わりに左手には剣、右手には盾をつけている。胸から腰にかけては半円で、頂点には赤く光るコアの様な物が見えた。足は通常二本の筈が一本しかない。

これが彼女の言った来たものなのだろうか。理解する前に少女は叫ぶ。

「いい！これからお前はコイツの操縦者になる！！」

「だから何言ってる！そんなこと」

「出来るの！お前なら！」

「答えになってな…うわあああ！」

「きゃあああああ！」

二回目の衝撃。どうやら というより確実にあの一本足ロボットから攻撃を受けているのだ。

攻撃の余波でロボットが横倒れになる。勢いは無かったがこの巨体が倒れるのには大きな衝撃だった。

その衝撃で頭を打つ。痛い。痛すぎるぞ。

何故俺がこんな目に遭わなければならないのだ。俺はそんなに罪深い人間だったのか？

そりゃ純白な人生じゃないだろうけど、これはあまりにも理不尽

だ。

「おい！一体どうして俺が…」

彼女への文句は途中で切れた。

というよりその言葉は彼女に届かないのを理解したからだ。

彼女も頭を打っていた。

しかし俺よりも重傷らしく頭から血が流れ、右腕からも生々しい傷が見えていた。

先程の衝撃にしては大きすぎる怪我。

「お、おい大丈夫か！？」

「お…お前なら…出来るんだ…これを動かせる…」

この期に及んでまだ言うのか。怪我をしているのに。俺が動かせると思っっているのか…？

根拠があるわけでもない。訓練を受けたわけでもない。そんな俺に、本当に動かせると信じているのか。

「おい、何で俺が動かせると分かるんだ？」

「そう、決まって…いる…七…大…罪の一つ…」

「何！？」

「『傲慢』…」

その言葉を残して彼女は意識を手放した。

七？大罪？傲慢？最近その言葉を…？

考えようとした瞬間、また衝撃。

「っ！！！」

今度は悲鳴をあげる暇も無かった。

相手のロボットはいつの間にか接近してきたのだ。

面前に迫る無機質な顔。

何を考えているのか、何をしようとしているのか。全て予想がつかない。初めての種類の恐怖。今まで生きてきて、感じたことのない殺気。

一つだけ分かることは、振り上げた剣で俺を殺そうとしているという事実。

この時、俺は二度目の絶望を味わった。

今度こそ終わりだ。謎の少女に無理矢理謎のロボットに乗せられて、謎のロボットに殺される。

謎だらけである。本当に。どうして。俺が。こんな目に。

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。

死にたくない！！！！

死にたくないか。

突如、頭の中に聞こえる声。

この声は俺が最初に聞いた声。トーンの低い男性の声。

生きたいのか。

ああ、死にたくない。

これから先は過酷な運命だけだ。それでも生きたいか。

今死んでしまつたら意味がないだろう。

それに未来の不安に怯えていたら何も出来ないだろう!!

ならば、呼べ。

何を。

私の名を。

名前？

もう知っているはずだ。

そうか、お前は…

傲慢にその名を叫べ!!

「ルシファー！！！！」

剣が振り下ろされた。

そのロボットにも感情があれば、勝利の悦が味わえただろう。

しかし、感情があったとしても勝利の悦は味わえなかった。

剣は途中で止まっている。
否、止められていた。

今まで身動き一つしなかった相手が動き、間一髪で剣を左手で掴んでいたからである。

「おおおおおお！！！！！！！！」

雄叫びとともに立ち上がる。

その姿はまるで悪魔。白き悪魔が真紅の瞳を光らせて今、現世に降りてきたかのように。

蛇に睨まれた蛙、という表現が一番お似合いの状況だった。悪魔からしみ出す狂気の殺気にロボットは動けなくなるほど恐怖を抱いた。

「いい加減にしろよおお！！！！貴様あ！！！！」

左手に掴んだ剣を乱暴に振り回す。

当然剣は手にくっついていてるので、ロボットも振り回される。

「でやあああ！！」

勢いを殺さないまま地面へ叩きつける。

その衝撃で校庭の砂が砂塵のように舞う。

一本足のロボットは一瞬何が起きたのか理解が出来なかった。
ひとまず立たなければと立ち上がろうとする。

しかし、立ち上がれない。

白き悪魔が足で力任せに押しつぶしてるのだ。

「お前なんかに！この俺が！負けるかよ！！！」

ガン！ガン！ガン！ガン！

何度も何度も踏みつける。中に人間でも入っていたら、とっくに死んでしまいそうな衝撃。

ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！

さらに踏みつける。すでに装甲は無惨にも曲がり、剣は折れ、盾はその役目を果たせずに朽ちていた。

何度も踏みつけるので地面は揺れ、側にあつた木々は全て倒れ、校舎もビシビシと音を立ててひびが入っている。

誰もが見ても勝敗は明か。勝負は終わっている。

それでも破壊衝動は収まらないのか、ついに背中の大剣の一つを抜く。禍禍しく、見たものの全部を破壊しないと止まらない殺意。自分だけが生き残れると象徴されている魂の塊。

その大剣を左手だけで天高く振り上げる。

「消えろおお！！！」

力の限り、もてる全てを出して、
剣は振り下ろされた。

一刀両断。

まさにその言葉が意味する通り、ロボットは大地ごと真つ二つに
切り裂かれた。
バチバチと音を立てる断面。生き物の様に痙攣する手。無惨過ぎ
る光景。

観客はただ一人、白き悪魔。

白き悪魔は後ろを向いてそのまま大剣を納刀する。
瞬間、白き悪魔の後ろで爆発が起こった。

白き悪魔は勝利の悦にも酔わず、歓喜の悦にも酔わず、ただ真紅

の目を光らせていた。

俺は気がつくと校庭に俯せに倒れていた。

相変わらず周りに人はいない。ちらつと見えた時計だとすでに7時を回っていた。

いや、周りに人はいないは嘘だ。

数m先にあの少女が倒れていた。身動きせず、俯せに倒れている。その周りに赤い水たまり。あれは全て血だとすぐに分かった。あれだけの量だ。命に危険が及ぶのは目に見えている。

早く助けないと。でも体が動かない。首から下は全く持って機能していない。

クソっ！動け動け動け！

思いに反し体は1ミリも動かない。

何でだよ！今動かないと彼女が死んでしまうだろ！何故動かないんだよ！！

必死に動こうとしても動かない。しまいには意識も朦朧とし始めた。

チクシヨウ、早く動かないと…。

彼女が…死んで…しまう。

は…や…く…。

ついに俺は意識を失ってしまった。

第3話 現実と狭間

物事には順序というものがある。

これは世界の摂理であり、唯一の真実。

しかし時と場合により、この摂理は消えてしまふ。
そう、悪魔の手によって。

暗い視界。

これは周りが暗いのではない。自分が目を閉じているからだ。ゆっくりと目を開ける。眩しい光が直接視界に入り込んできた。

しばらくして、目が慣れてきた。

白い天井。あまり見覚えがない。目を開いたことで自分がどういう状態なのか分かった。

ここは病院なのだ。質素なベッドと固い枕。どうやら一応一人部屋のようで、ベッドの隣には花が飾ってある。周りには誰もいない。

窓は空いていて生暖かい風が入ってくる。外はすでに暗くなっている、暗黒の中に月光が降り注いで仄かに明るい。

起きようと思って手をつく。結構な時間を眠っていたのか、なかなか力が出ない。やっとの事で起き上がりナースコールを押す。

とりあえず今の状況を整理しなければ。

学校は？一本足のロボットは？俺が乗ったロボットは？
そして、あの少女は？

思い出しそうで、思い出せない。

一本足に殺されそうになった後の記憶が曖昧だ。俺じゃないみたいな感覚が舞い降りてきて……。駄目だ。思い出せそうにない。

思い出す前に、若い看護婦が来た。

「気分はどうですか？」

「少し頭が…俺はいつたいどうしてここに？」

「あなた、校庭で倒れていたらしいわ。部活動をしている生徒に発見されたらしいけど」

倒れていたのは覚えている。だがおかしい。

あの時周りには人がいなくなっていたはずだ。誰一人。俺と彼女以外。

だとするとやっぱり幻覚だったのか。はあ…。我ながら変な夢を見たものだ。

そうだ。あんな事が現実な訳なかったんだ。自然に自嘲が出てくる。

「あら、どうしたの？」

「いや、変な夢を見ていたらしくて。でも夢で良かった。死ぬかと

思ったほですから」

「そうね。夢だけで済むなら良い事よね」

この看護婦さん。過去に何かあったのだろうか…。
深く詮索しない方が良さだろう。

看護婦さんは俺の脈を測ったり、気分はどうかと聞いてきたりした。

俺の思っていた以上に体は異常なく、大きな怪我もないらしい。

「特に頭に異常も見られなかったし、きつと明日になれば退院出来ると思う」

「わかりました」

「じゃあ安静に寝ていてね」

そう言い残し、後ろ手でドアを閉めて出て行った。

俺はまたベッドに寝ころんで腕を枕にする。枕が固いからだ。

あれが夢だと分かればもう怖がることも考えることもない。きつと俺は疲れていたのだ。そうに違いない。だからあんな夢を見てしまったんだ。

馬鹿だなあ俺。阿呆だなあ俺。現実なわけないじゃんか。

何を勘違いしていたんだ。リアルな夢。そんなこともあるじゃないか。明日からはまたいつもの日常。いつも通りの一日を過ごすんだ。

「あー夢でよかったー」

「夢じゃないぞ。福音莉音」

……。

今、俺以外の声が聞こえなかったか？
いやいやそんなはずは。この部屋には俺以外誰もいないはずだ。
でも聞き覚えのある声。そうこれは……。

「あの時のおおお……!!」

「やっと気がついたか」

声がした方向 正確には窓の方を見て仰天する。
その『彼女』は窓の外側から上半身を乗り出していた。

吸い込ませそうな赤い目。印象的な白い髪。風になびいて白色の線が踊る。

そして何より黒いタイツ。もしかしたらパイロットスーツの類なのか。が目立っている。

赤白黒。この三色が絶妙な色合いの美麗を醸し出している。

先程と違うとすれば額に痛々しく巻かれた包帯だろうか。それでも彼女の美しさに変わりはないのだが。

「やっと見つけたぞ。見つけたと思ったらいつの間にか車で移動させられてしまっていたし。また探すのに苦労した」

「な、な、な、な、な」

夢ではなかった。それは彼女自身が証明してしまっている。…あまり信じたくなかったが。

とにかく彼女がいるということはあのロボットも…現実だろう。

「どうした？何か言え。それとも私のあまりの美しさ見とれて、声もでないのか。そうかそうか」

勝手に解釈してうんうんと頷いている。凄くむかつく。どうやら彼女はプライドが高いと見える。

「ほれほれ、遠慮せずに世辞を言うがいい。むしろ言え」

…前言撤回。彼女は物凄ーーーーーくプライドが高い。確実に。最初会ったときもそうだったが、彼女は見た目に反して性格は最悪、と思った。

さて、ずっとむかついている場合でもない。今の内に疑問を答え
てもらおう。というかしてもらわないと気が済まない。

どうしようか。色々聞きたいことはあるけど、どれを最初に聞こ
うか迷う。

どういう状況で？あの悪魔は？あのロボットは？そして…。

「スペリビア」

「え？」

「私の名前だ。私は何者かと聞いただろう？答えられる状況ではな
かったから、今」

そういう彼女の スペリビアの笑顔に俺は今度は本当に見とれて
しまった。

「聞きたいことは多いだろう。この私が優しく教えてやろう。どう
だ、嬉しいか」

…俺はまた前言撤回をした。

窓から乗り出している人と話すのも変なのでとりあえず彼女を部屋に入れる。

スペリビアを椅子に座らせ、俺はベッドに座って話をする。

「そうだな。とりあえず君の名前は分かった。じゃあスペリビア、君は人間？あの俺が乗ったロボットは？戦った一本足のロボットは？そしてあれらは何なんだ？」

「まてまてまて。いくら私が質問して良いと言ったが、そんな一気に聞かれても困る。一つずつ聞け」

命令口調なのがあまり気に食わないが致し方がない。
とりあえず一番知りたいことを聞いた。

「スペリビア、君は人間…なのか？」

「違う。私は悪魔だ」

「は？」

悪魔？こんな可愛らしい娘が？むしろ小悪魔的と言った方が納得できる。

「疑っているな。だけど今疑っても仕方がないぞ。これが真実なの

だから」

自信満々な表情だ。むしろ清々しい位勝ち誇っている。
まあ…あんな事の後じゃ信じるしかない、か。

「…じゃああの俺がロボットっていったい何だ」

「名前はもう知っているはずだ」

「…ルシファー」

「そうだ。ルシファー。声を聞いただろう」

そう言えば最初に聞いた声があつた。

あれがルシファーの声なのか…？

「まあこの事は後で詳しく話すでしょう。それを説明するにはまだ話さなければならぬことがある」

「何だ」

「…この世、といつても人間には理解しがたい話だが」

「？」

突然妙に真剣な顔になってスペリビアは話し始めた。

「この空間には三つの世界があるのだ」

いきなり現実味の無い話な気がする。いや、最初から現実味が無いんだが。

一応口をはさまず聞いてみる。

「まずは人間界。お前の世界だ。もう一つは悪魔界。私の世界でもある。さらにもう一つは天使界。その世界の名の通り人間、悪魔、天使がその世界に住んでいる」

あまり実感がわかない。というより信じられないと言った方が的確だった。

彼女のことは悪魔と信じているとしよう。だけど世界が合計3つもあるなんてナンセンスな話にしか聞こえない。

それに天使と悪魔の世界があるなんて到底想像できない。それでも彼女は真剣そうな顔で続ける。

「この三つの世界には順位があつて、最下位は人間界。上位に悪魔界。それに並んで天使界。この三つの世界は三角形に成り立っている。

ここまでではわかったな？」

「う、うん」

曖昧な返事をする。聞いてはいるのだが理解は出来ない。

あまりにも唐突、想定外の範囲外だったのでいまいち理解不能だ。

「この世界はお互い繋がっていたが、お互い干渉することも無かった。まあ、人間にいたっては存在さえ知られていないんだがな」

その存在、今俺が知ってしまったんですけど。

「だが…創聖歴15200年、人間で言うと2000年前に悪魔界へ天使界の奴等が攻め込んできたのだ。無論悪魔界もこれに反発し、争いが起きた。そしてそれは今も続いている…」

「それって…つまり2000年間も戦争を続けているって事なのか！？どれだけ長い間戦っているんだよ！」

「長さの問題ではない！彼奴等は…天使共は…！！我らの同胞を！」

突然スペリビアは声を荒げる。

顔はまさに怒りの形相で、目はつり上がっていた。

その様子に俺は恐怖した。

スペリビアはあはあと息を整える。

「…すまない、取り乱した」

「い、いやいいんだ。話を続けてくれ」

俺はもうこの話を信じ始めていた。

きつと最初から信じていた。ただ物事を理解できないだけで。

それは彼女の怒りから感じ取れた。芝居でもあんな見幕は出来ない。

つまり、彼女が言うことは『本当』のこと。

「…私たち悪魔は窮地に立たされている。悪魔界が攻め落とされるのも時間の問題だろう。だから私はここに来た」

「人間界に来たって事だよ…。でも何故？悪魔界ってのがピンチなら人間界に来ている暇なんてないだろ」

「ちゃんとした理由がある。何故ならルシファアの真の力は人間にしか出せないのだ」

「へえー…って何でだよ！あれはお前等悪魔のものなんじゃないのか！？」

「そうなのだが、アレは私たちの世代が創った物ではない。私の生まれる前…もしかしたら世界が生まれる前…」

「ちょちょちょっと待て。スペリビア、君はいったい何歳だ」

「人間でいうと2116歳位だと思うが…って何レディに年齢を聞いている！失礼ではないか！」

2116歳。

つまり俺は金さん銀さんの200倍生きている悪魔と話しているわけだ。はは。面白い、面白いな。

って冗談きつすぎる！俺と全然変わらないように見えるのに！

「まったく…話を続けるぞ。元タルシファアは伝説上…『七つの大罪』に出てくる悪魔で、実際には存在しないと言われていたんだ」

「でも、アレがルシファアなんだろう？」

「ああ、伝説は本当だったんだ。私にも理解しがたいが、実際にあった…というより現れたんだ。私の前に」

「現れたって…どういう意味だよ」

「そのままの意味だ。私も選ばれた適性者だからな。ルシファーは語りかけてきた。『私の力を欲すれば下層の手を借りよ』と。つまりルシファーの真の力は人間がいないと出せない、というわけだ。だから悪魔軍は私とルシファーを人間界に送り込んだんだ。天使達の戦いに勝つために」

その適性者が俺で、ある意味（嫌な意味で）選ばれてしまったのか。

「もちろん『七つの大罪』という名の通り、あれ以外にも後6体存在する。今どこにいるのかは知らないがな」

「ええ！？あんなのがあと6体もいるのかよ！！…ん？でも待てよ。今どこにいるのかは知らないって言ったよな。何でだ？」

「お前も見ただろう。悪趣味な一歩足を」

悪趣味かどうかは別として、一本足と言うとあの相手だった口ボツトのことだろう。

「あいつは天使軍の無人戦闘兵器、通称インフォリオエンジェルズと呼ばれている下級戦士だ。人間界に転送する時、彼奴等が襲ってきたの。だから本当は一ヶ所に転送する筈だったのに、彼奴等の攻撃でバラバラに飛ばされちゃったって訳」

「へえ…じゃあ君は今までずっと一人で、俺を捜していたってわけかよ」

「別に一人ではない。ルシファーもいたし」

「そういう意味じゃなくって…そういうええアレは今どこにあるんだ？まさか学校に置きっぱなし何てことは…」

「そんな馬鹿なわけがないだろう。決して見つからない場所にあるんだよ、今は」

決して見つからない、というのは引っかけだったが絶対の自信がある言い方だった。

「…さて、質問には一応全て答えたと思うが？」

彼女は細めになり髪を触る。

その仕草がちょっと可愛く見えた。

「整理をすると君は悪魔で、君の世界が天使に襲われていて、七つの大罪に出てくる悪魔を戦いに使うために人間界に来て、俺がその適性者だと」

「そうそう、漸く理解してくれたか」

「何も説明せずにあんなのに乗せたのは君だろ！？それにまだ…」

「信じられない、か？でもお前は知ってしまった。信じるしかないんだよ」

確かにあれは現実で、彼女も悪魔なんだろうと思う。

でも今まで生きてきたアイデンティティを一日にして崩された気

分で、正直いい気持ちではない。

「で、協力してくれるな？」

スperiビアが顔を近づけて聞いてきた。

至近距離。鼻の頭がくつつきそうなまで接近してくる。

「ちょ、近い近いって！」

「もちろん協力してくれなければ此方にも考えがある。例えば死んだ後も業火に焼かれるようにするとか」

「脅迫じゃないか！」

「手段を選んではいられない。もう貴様は知ってしまったんだ」

知ってしまったって、君がむりやり引き込んだ様なものだろう！
まあ：境遇を知って可哀想だとは思ったけど、自分が手伝う理由も義理もない。

そもそも俺が彼女に手を貸して何になる？むしろ損の方が多いじゃないか。ただ人並みの生活を生きていきたいだけなのに、何故こんな状況になってしまっているのだろう

どんどん、腹が立ってきた。

「さあ」

「君の言ったことは分かった。君の世界が危険になっているのも分かった。でもそれに協力するかは別だ！俺は普通に生きていきたいんだよ！！」

スペリビアの言葉を遮り、大声をあげてしまう。

彼女は心底驚いた顔をしていた。

でも俺は頭に血が上っていて、そんなことは気にもしなかった。

「大体どうして俺なんだよ！！あんな怖い目にあつて、それでまた怖い目にあえつてか！！冗談じゃない。何の嫌がらせだよ！俺は普通に、無難な生活を送りたいだけなのに！！どうしてそれをぶつ壊す様な真似をする！俺には関係ない。君も関係ない！！」

俺はもうあんなのには乗りたくないんだ！！！！」

今度は俺が息を乱してしまう。

頭によみがえる恐怖感。迫り来る狂気。死ぬという絶望感。

その全てが俺を怒りへ導いた。

そういった好意が彼女を傷つけると分かっていたながらも

「……………」

スペリビアは何も言わず、ただ悲しそうな顔で此方を見ていた。

彼女の顔を見て俺は正気に戻る。いくら何でも言い過ぎた。彼女は俺を　俺一人を頼ってきたのに。

「あ、ごめ」

「…いや、いくら何でも無理な頼みだった。すまない」

謝罪の言葉を遮り、スペリビアは窓へ立つ。

「そうだな。お前のような無関係の人間を巻き込むということ自体間違っているよな」

顔を外へ向けているので彼女がどんな顔をしているのかは見えない。

だけど声は元気が無く、泣いている声に似ていた。

「お、おいどこ行くだよ」

「どこという当てもない。お前以外の適性者を探さ。迷惑をかけたな」

今にも窓から出て行こうとする彼女を俺は止めようとしたが、出来ない。

止めたいが、今の俺には止められないと感じたからだ。

「…もし」

「？」

「もし少しでも協力するという気持ちがあったら、明日の6時6分6秒にあの学校に来てくれ。…まあ、無理は言わない。忘れてもいい」

スペリビアが目だけを此方に見せる。その目は潤んでいるように見えた。

すぐにまた外へ向き、そのまま飛び降りてしまった。

「あ、おい！」

制止する声もすでに届かない。すぐに俺は窓の外へと身を乗り出したが、周りに人影どころか、気配さえ感じない。

俺が…。

俺が彼女を泣かしたのか…？

そうだろう。だって俺が彼女を否定したのだから。

でも、俺だって死にたくない。怖い目にあいたくないんだ。

いいんだ。これで元の日常に戻るだけ。気にすることはない。もう俺には関係ない。

俺は布団を深く被って、自分に言い聞かせた。

その夜、俺は一睡もしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9213d/>

DEVIL-DEDICATE

2010年10月17日02時59分発行